

ハジケリストの出がらし

字だけを載せる。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハジケリストがそれとなくわちやわちやしているだけ。

目 次

先生！ 僕のオルガンがファとミしか出ません！ お食事前には手洗いうがいを忘れずにネ☆

電化製品スケートの、巡るめく恐怖！ 奥さん、冷えた白鳥はいかがですか？

6 1

先生！ 僕のオルガンがファミミしか出ません！
お食事前には手洗いうがいを忘れずにネ☆

「本村が…リザレクトしたつて!? それは本当か!!」

勢いよく立ち上がり、椅子が大きな音を立てて倒れる。

「ああ…ああ。分かつた、すぐ行く！」

携帯を閉じてスーツを羽織り、扉へ駆け出す。

「待つて下さい部長！」

平社員の中田が、その手を掴んだ。

「それはきつと罠です！ 本村がどういう奴か、あんたも知ってるはずだ!!」

「うるせえ!!」

その手を振り払い、中田を思い切りブン殴る。

「グギャアアー!?」

「オレだつて…オレだつてな、んなこたあ分かつてんだよ!! でも…男にはやらなきやいけないときがあるんだ!!」

そして、扉を蹴り破る。

——待つてろ、桜前線——

続く

「首領パツチ君、遊んでないで早くこつちきてよ」

行列に並んでいるビュティイの声に、首領パツチと中田が振り返る。

「そろそろファミレス、入れるんだから」

「ハーサイ、ママー！」

一人が走り出すと、ビュティイがツッコんだ。

「なんか変なの連れてきてるー!!」

「ん」

彼女の声に、ボーボボが後ろをチラリと見やる。

「あ！ 中田市在住中田区区民の、中田星人さんだー！ サインくださーい！」

嬉しそうな声を上げると、色紙とペンを取り出し、首領パツチの方

へ走り出していった。

「ボーボボ！ もうそろそろ席空くんだつてば!!」

ビュティイが大声を上げるが、「マチルダ」と大きく書かれたサインをもらつて興奮している彼は、帰つてくる気配がない。

「マチルダつて誰だー!? そいつ中田星人なんじやなかつたの!?」

「七名でお待ちのビュティイ様ー」

その時、ウエイトレスが声をかけてきた。

「あ…えつと」

事情を説明しようとするビュティイだが、横から出てきた手に制止させられる。見上げると、ピンクのぐるぐる頭が太陽に照らされていた。

「ソフトンさん」

「オレが先に入つて、席を確保しておこう」

そう言つて、店内へと入つていった。

「あ、ありがとうございます…」

ビュティイがお礼を言うと同時に、田楽マンがソフトンの後を追いかけていった。そして振り返り、ニヒルな笑みを浮かべたかと思うと、「任せときな

とかつこつけて店内へと走つていく。

「…うん…」

微妙な顔を浮かべて小さい彼を送り出すと、ビュティイはボーボボ達の方へ目を向ける。

「祟りじゃー!! 呪いじゃー!!」

そこでは陰陽師の服を着たボーボボが、祭壇に天の助を捧げて盛大な儀式を執り行おうとしていた。

「なんか奉つてるー!! 天の助くん、いつの間にそつちに!?」

「さつきです、どうも。供物ですよ。さあ、献上したまえ」

「さんのアンタだよ!!」

ツツ「ミを入れていると、空が段々黒い雲で覆われ始めた。

「い、一体何が始まるつていうんだ…」

上を見上げながら、何か胸騒ぎがしたヘツポコ丸は、ビュティイの前

に立つた。

「ビュティさん、下がつて。何か来るかもしれない」
「う、うん…」

不安そうな顔を浮かべるビュティ。

少し下がると、背中に何か当たつた。ゆっくりと振り返る。

「アタシ、怖いわ！ 雷苦手なの!!」

なぜか、中田が怯えて立つていた。

「きやあああああ!!」

驚いたビュティが叫ぶと、ヘッポコ丸がすかさずオナラ真拳を中田に喰らわせた。

「オナラ真拳奥義、臯月!!」

「ウギヤアアアア!!」

飛んでいく中田。それに目もくれず、ボーボボが叫び始める。

「来たれ！ 我が分身ズツキニーよ!! 祝杯だ！ 祝杯をあげるのだ
!!」

しかし、何も起こらない。

「ズツくん、おやつよ！ 降りてらっしゃい！ いつまでゲームして
るの、一日一時間つて決めてるでしょう!?」

母親のように呼びかけると、大声が上から聞こえてきた。

「うつせーなババア、あとちよつとでラスボスなんだよ！」

「明日やればいいじゃない！ 言うこと聞かないと、ゲーム禁止にするわよ！」

「やあだあ!! 今日やるのー!! うわーん！」

泣きべそが聞こえてきたかと思うと、バケツをひっくり返したよう
な雨が降ってきた。

ビュティとヘッポコ丸は濡れないように、ファミレスへと走りこ
む。

「チツ、ビービー泣きやがつて」

ボーボボは舌打ちをすると、供物として掲げていた天の助をわしづ
かんだ。

「な、何をするか！ 朕は國家なるぞ!!」

「男の子が泣くんじゃありません!!」

ジタバタともがく天の助を、上に向かって勢いよく放り投げた。

「ぎゃああああああー…………」

天の助は泣き叫びながら、黒い雲に吸い込まれるように飛んでいった。

しばらくすると、龍のコスプレをした首領パツチが天の助を咥えながら降りてきた。

「うわあああああああ!! ズツキーニじやなくて、神龍が降りてきましたー!!」

ボーボボが頭を抱える。

「てめー、ババア!! おやつ投げてくつから、ゲームがバグつちまつたじやねーか!! ファミコンはデリケートだつて、何度言えば分かんだけよ!!」

「いてえええええええ!! 刺さつてる刺さつてる!! しゃべる度にキバが、ザクザク刺さつてるからー!!」

苦しむ天の助だったが、キバが食い込み逃げることができない。「くつ…オレもここまでか…」

何か覚悟したような顔をすると、フツと笑った。

「ビュティ! オレのことはいいから、早く逃げろ!!」

「ええ!」

声をかけられたビュティは、困惑したような声を上げた。

「こいつは、怒りで我を忘れちまつてる…今の状態じや、どうにもできねえ!!」

この言葉に、すぐさま首領パツチが答える。

「私はS（シェンロン）です」

「全然我を忘れてねえー!!」

いつものビュティのツッコミが入つても、首領パツチと天の助はさらに茶番を続けた。

「セ・ボーン」

「ヌ・セ・ボーン」

「デ・ラ・ミュ・ボーン」

中田もちやつかり参加している。

「ああ、もう訳分からん…」

ビュティイが頭を押さえ、ため息をつく。

「さて」

ボーボボが軽く伸びをして、骨を鳴らした。

「腹も減つたし、ファミレス行くか」

「あ、うん…」

ビュティイは領き、彼の後を追った。

ヘツポコ丸も追おうとしたが、クルリと振り返る。

「ほら、二人共早くしろよ」

「うん！ パパー！！」

龍から元の姿に戻った首領パッチと、傷だらけの天の助が、楽しそうにヘツポコ丸にしがみついた。

「バ、バカ！ 歩きづらいだろ！」

「へつきゅん、どこ行く？どこ行く？？」

「ファミレスだろ！」

中田は一人残され、さびしそうな表情をした。

「楽すれば、道にすぐれた、竹が立つ…ってか」

一句読むと、やれやれと肩をすくめる。

「いいんじやねえの、こういう終わり方も。嫌いじやないぜ」

そして、ゆっくりと翼を広げ飛び立つていった。

「アンタ鳥だつたんかい!!」

ビュティイのツッコミは、夏のすがすがしい空に響いた。

電化製品スケートの、巡るめく恐怖！ 奥さん、冷えた白鳥はいかがですか？

喫茶店のテーブル席に座っている、二人。そこでは、ちょっとした修羅場が起こっていた。

「な、ボボ子。この通りだからよお…」

「や！ もう別れるもーん」

ボボ子はパイイツとそっぽを向いて、アイスコーヒーをストローですつた。

「そんなこと言うなよ、あいつとはもう別れてきたからさ…」

「パツチン、それ前にも言つてたじyan！ もう信じられないよ…」

パツチンと呼ばれたオレンジ色の彼は、焦った様子で頭をかく。

「マジで、ほんとにマジで浮気なんかしないって」

「なら、ボボ子のいうこと聞いてくれる？」

「お、おう。もちろん！」

引きつった笑顔を浮かべて答えると、彼は下を向いてほくそ笑んだ。金づるはまだ逃がすわけにはいかない。ほかの女と遊ぶためにも、財布のひもが緩いボボ子をここで手放すわけにはいかないのだ。「それじやあねえ、えつとー、確かこの辺にー…」

彼女は自分のバッグを探ると勢いよく大きい何かを取り出し、目の前にいるパツチンに投げつける。

「その冷蔵庫に乗つて、町内一周して来いや!!」

「バハマ!!」

いきなり出てきた電化製品を受け取ることができず、彼は冷蔵庫とともに喫茶店の窓を割つて飛び出していった。外を歩いていた数人が、彼の巻き添えを食らう。それを目撃した人々はその周りを取り囲み、だんだんと騒がしくなっていく。首領パツチは何事もなかつたよう起き上がりつて軽く体をはたくと、深く息を吸つた。

「見せもんじやねえんだよ!! 失せろやボケエ!!」

彼は目を血走らせながらわめくと、その場にいた人々は悲鳴を上げ

て逃げていく。

「つたく、野次馬どもが」

ブツブツと文句を言いながら冷蔵庫にまたがろうとしていると、急に腕をつかまれた。振り返ると、ボーボボがそこに立っている。

「お前、本当にジョッキーになるつもりか」

「チツ、またてめえかよ」

舌打ちをしながら、彼の手を振り払つて再び冷蔵庫のドアに手をかける。だが今度は脇を抱えられてしまい、冷蔵庫から離されてしまつた。首領パツチはジタバタと暴れるが、逃げることができない。

「こんの野郎、邪魔すんなつて言つただろうが！」

「考え方！　まだお前には若すぎる！　この馬は、お前なんかじやさばけない代物なんだぞ！」

「うるせえ!!　オレをなめんなああああああ!!」

相手のあごを蹴り上げて拘束を解いた彼は、冷蔵庫にまたがつて側面をたたく。すると冷蔵庫が馬のようにいななき、ひづめの音をさせながら滑り始めた。

「わらわは、あなた様には不釣り合い……どうか、分かつてくださいませ」

首領パツチは涙をいっぱいにためながら、着物をなびかせて冷蔵庫に運ばれていく。その後ろから、甲冑を着込んだボーボボが色違の冷蔵庫に乗つてこちらへ向かってきた。

「どこへ行くのですか、姫…………ツ!!　私はあなたを！　いつまでもお慕いしているのです…………!!」

ホラ笛を吹きながら冷蔵庫の側面をバシバシとたたくと、冷蔵庫は苦しそうにいななきながら姫の方へと猛スピードを出して向かっていく。ようやく隣に並ぶと、ピストルがこちらに向けられていた。

「な、何!!」

「残念だつたな、ボボボーネ。今日でてめえのハジケファミリーは、バーン！　…壊滅さ」

いつの間にか着物を脱ぎ捨てていた首領パツチは、サングラスをかけて黒いスーツを決めていた。

「パツチーノ……裏切ったのか！」

「違うぜ、ボボボーネ。俺の名はドン・パツチーノ：我が新生ハジケファミリーの頂点に立つ男だ」

額にピストルを突き立てられるが、ボボボーネは不敵に笑つていた。

「フツ：お前がトップになつたところで、ついてくる奴なんか一人もいねえと思うがな」

「それはどうかな？」

パツチーノはサングラスを上にずらすと、前を向いた。そこには、見覚えのある人物が立つていた。

「ヘッポコー二！？まさか！奴は、ファミリーのナンバー2だつたはず…!!」

彼はあたりをキヨロキヨロと見回して誰かを探しているようだつたが、高速で近づいてくる二人を見つけ、目を飛び出させた。

「うわあああああ!!何してんだ二人共……………!?」

「あ、センパアーア!!」

「は!?先輩!？」

「きつと来てくれるつて、そう信じました……………！」

ボボ美が笑顔で手を振ると、横にいたパチ江が手を振り回しながら怒り始める。

「ちよつとアンタ！アタシのへつくんに、何色目使つてんのよ!!」

「ふーんだ！こういうのは、先に取つた方が勝ちだもーん。つてい

うかー、パチ江先輩には彼氏いるじやないですかー」

相手の言葉に、彼女は頬を染めて目をパチクリさせた。

「な、なんでアンタがやつくんのこと…」

「ウフ、やっぱりそなんだ。ボボ美の勘、バツチシ当たつちやつた」

「ああつ!?カマかけたのね、この卑怯者!!」

「てへ、ごめんなさいっ」

二つの冷蔵庫は二人の女子高生乗せたまま、勢いよくヘッポコ丸を

追い抜いて行く。

「し、しまつた！」

ヘツポコ丸は急いで冷蔵庫の後を追いかけ始め、ボーボボに向かって大声を出した。

「ボーボボさん、何遊んでるんです！ あそここの喫茶店で待ち合わせつて言つてたじやないですか！ ビュティさんも探してるんですよ！」

しかし、答えが返つてこない。冷蔵庫の隣に並ぶと、彼らはようやく気が付いたようにヘツポコ丸の方を向いた。

「あなた、お弁当の販売が来たわよ」

「おお、本当じや。いやー、ここまで待つたかいがあつたわい」

首領パツチは読んでいた新聞を畳むと財布から紙幣を出し、冷蔵庫から身を乗り出してヘツポコ丸に渡してきた。

「あのー、ミシシッピ弁当ないかのう。この駅の名物だと聞いておつたんじやが」

「ねーよそんなん!!」

「んだとコラア！ 駅弁のためにここまで来たんだぞ、なのに無いつてどういうことだよテメー!!」

激怒した首領パツチは、相手の胸ぐらをつかんでぶんぶんと振り回す。それを見たボーボボが、困った顔をしてヘツポコ丸に話しかける。

「ごめんなさいね、この人駅弁大好きなのよ。だからそれのことになると、いつつもこうで…」

「ボーボボ！」

夫のことを愚痴ろうとした矢先、ヘツポコ丸の後ろからビュティが現れた。

「む、ビュティか

「ビュティか、じゃないよ！ 二人とも何してるの!?」

「よく聞いてくれた」

ボーボボは自分の口に作り物のくちばしをつけると、首領パツチと共に白い翼を広げた。

「僕たち、白鳥になろうとしているんです」

「無理だろ!!」

バツサリと言い放つビュティだつたが、首領パッチは全く引かなかつた。

「バカだな、信じりゃなんでも上手くいくつていうだろ？が。何のためにオレ達がここまでやつてると思つてるんだよ」

「見かけだけじやん!!」

「形から入るのが基本だろ？が!! なあ、ボーボボ!!」

同意を認めようとするが、彼は普段の姿に戻つて首領パッチのことを見下すような目で見つめていた。

「はあ？ 何言つてんのお前」

「ひどい…アタシとはお遊びだつたのね！ 死んでやる…アンタを後悔させるために、この中に入つて死んでやるんだから!!」

泣きながら冷蔵庫のドアを開くと、天の助が体を折り曲げてぎつちぎちに詰まつっていた。ドアが開かれたことに気が付いたのか、こちらに苦しそうな笑顔を向けてくる。

「お、奥さん…今夜のおかず…ところてん、いかがですか？」

「何やつてんの、お前!!」

ビュティが目を飛び出させながら驚いている、首領パッチはその冷蔵庫を力強く蹴り飛ばした。

「ギヤ————!!」

彼を乗せた冷蔵庫は、空の彼方へと飛び上がって行つてしまつた。

「天の助く————ん!!」

「天の助————!!」

ビュティとヘッポコ丸が空を見て叫ぶが、冷蔵庫はもう見えない。

どうやら、かなり遠くまで飛ばされてしまつたようだつた。

「アイツ、立派になつたな」

「オレ達より先に白鳥になりやがるたあ：ヘツ、見上げた根性だぜ」

冷蔵庫に乗つている二人も空を見上げ、なんだか寂しそうな顔をしている。

「首領パッチ君のせいだよ!!」

すかさずビュティがツツコミを入れると、彼女の前に新しい冷蔵庫が滑ってきた。

「え、何これ」

「それに乗るといい。次の町まではかなり距離があるからな」

「あ、ありがとう」

彼女は礼を言うと、目の前にある冷蔵庫に飛び乗った。後ろの方に座ると、ヘツポコ丸に声をかける。

「へつくんも、一緒に乗ろうよ。前の方、空いてるから」

「え!? あ…えっと」

ヘツポコ丸が顔を真っ赤にさせてているのに気が付かず、ビュティは髪の毛を耳の上にかき上げながら隣の冷蔵庫に座っているボーボボの方を向く。

「いいよね、ボーボボ」

「うん、いーよ」

気の抜けた彼の返事に笑うと、ほら早く、とヘツポコ丸に再度声をかけた。彼は素早く冷蔵庫に乗り、高鳴る胸を押さえる。首領パツチはその様子を見て悔しそうにハンカチを噛んでいるが、誰も気が付いていない。

「ハイヨ、シルバー！」

ボーボボが叫ぶと冷蔵庫たちは一層スピードを増し、車道を滑つて行つた。